平成28年度(2016年度)
日本特別活動学会　第３回　実践事例募集事業

推　奨　実　践　事　例

事例番号　３－４

ワールド・カフェ手法、ジグソー法による話合い活動を活かした学級経営

練馬区立石神井東中学校　　藤　本　謙一郎

実践テーマ	ワールド・カフェ手法、ジグソー法による話合い活動を活かした学年経営
実践区分 ○囲み	(学級活動)・ホームルーム活動　　児童会・生徒会活動　　クラブ活動　　学校行事 その他（具体的に、　　）
実践事例の背景、ねらい、意義など	平成２５年度東京都教育研究員として特別活動について学び、その後も過去の研究員の研究内容を実践し、生徒の自治的活動を充実させていった。特別活動を充実させた理由は、当該学年（当時は中学１年生）が小学校で学級崩壊を経験しており、大人不信の意識が高い生徒が非常に多く、彼らの自己有用感を高め、望ましい人間関係を構築することが喫緊の課題であったためである。そこで、小集団による話合い活動（ワールドカフェ手法、ジグソー法など）を繰り返し実践し、行事に向けて自己決定や集団決定を行うことで、活動を意欲的に取り組めるようにした。また、リーダー不在の状態であったため、その育成として生徒主導型の学級活動を行った。事前指導は学年主任が全クラスの学級委員を指導し、学年単位で生徒が司会・進行をすべて努める学級活動を行った。 このようにして、「学校生活は自分たちで創るもの」という実感を生徒に感じさせ、自己有用感を高め、自治的活動を充実させていった。
実践の時期	平成２５年９月～

【実践事例】

実践．ジグソー法を取り入れた学級活動

(1)題材　「運動会の大成功に向けて」(実践時期　平成27年5月 中学3年)

内容（1）ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決

(2)題材設定の理由

本題材「運動会の大成功に向けて」は、東京都教育研究員特別活動部（平成24年度）から継続して検証している「ジグソー法」による話合い活動を通して、互いを認め合い尊重する態度を高め、学級集団が目標を意識し、運動会の成功に向けて充実した学校生活を送るために、役割や責任を意識して取り組む強い姿勢と態度を育てたいという理由により設定した。

(3)指導のねらい

取組の中で、学級集団を高めるための方法について合意形成し、それに基づいた実践を通して、学級への所属感や連帯感を深める。事前活動から事後の活動まで、適切な機会で学級活動カードを効果的に用いた評価を行うことで、行事の成功に向けての集団活動をより活性化させていく。

学級活動においては、自主的・実践的な態度を伸ばしていくことや自分の意見や考えを伝えるための場面を意図的にもたせることが必要であり、話合い活動を中心とした実践や振り返りを通して、自分への自信や、互いを認め合える効果が期待でき、よりよい人間関係づくりにつなげられると考えられる。

事前から事後までの取組の中で、自己評価と相互評価を意図的に取り入れ、互いに認め合い協力し合う活動を通して、学級集団の人間関係や所属感、連帯感を高めることに有効であることを確認することを検証すべく学級活動を行った。

【ジグソー法の概要】

班活動において、特定の生徒が全てを行ってしまうことがある。このようなことを避けるために「ジグソー法」という学習方法がある。アメリカの社会心理学者エリオット・アロンソンらが 提唱した学習スタイルで、誰もが発表者となり表現力・思考力を高める有効な学習方法である。

【ジグソー学習の手順】

①実行委員を中心とした生徒で代表者会議を行い、活動スローガンとカウンターパート班（テーマ別班…クラスの人数に応じて、5～6班）を設定する。

②生徒アンケートを実施し、活動班を決定。カウンターパート班（テーマ別班）の編成を行う。活動スローガンのもとに、取組の成功に向けて各自が役割と責任を分担する。

③同じテーマの者同士で話合い活動を行い、意見交換や調べた内容を深め合う。

④それぞれのテーマ班のメンバーが代表となり、ジグソー班（混合班）を編成する。ジグソー班に分かれ、学習成果を他のメンバーが分かるように報告し合い、質疑応答を行う。

◎ジグソー法の説明に関しては、「東京都教職員研修センター　教育研究員報告書　中学校：特別活動　平成２４年度」も参照。

http://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/kenkyuin/chu/toku.html

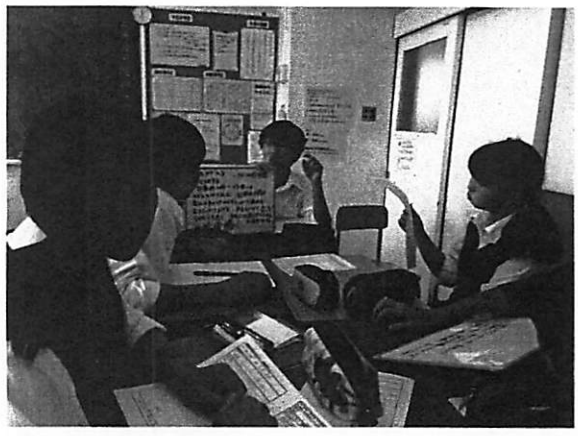
(4)成果と課題

【カウンターパート班（テーマ別班）】

生活班を母体にしてテーマ班を振り分ける場合や、本実践のように生徒の興味・関心や希望に基づいてアンケートを行い、調整することもできる。

特に、学校行事への取組では、生徒の意思を尊重し、希望をとることで、役割や責任を大きくもたせることにつながった。）班の中ではリーダーを立候補により選出し、学級の中心となる実行委員（大リーダー）のもとに、小リーダーとなる位置付けをもたせ、組織の柱を強化することができた。

【ジグソー班（混合班）】



生活班を母体とし、カウンターパート班を編成した場合は、そのまま班長がジグソー班のリーダーとなり、班員が混合班の一員とできるため、編成は行いやすい。テーマ班の希望をとった場合は、学級の人間関係や生徒の話合い活動のバランスに応じて、意図的に混合班を設定する必要がある。班編成については、学級担任と代表者会議の生徒＋立候補したテーマ班リーダーをもとに混合班を編成した。（混合班での司会進行リーダーも決め、話合い活動が円滑に行われるよう工夫した。）また、話合い活動時は、テーマ班での決定事項をホワイトボードに記入させ、説明の際にフリップとして使用し、どのテーマ班の生徒も、同じ内容が相手に分かりやすく説明できるように工夫した。

【ジグソー学習の効果・留意点】

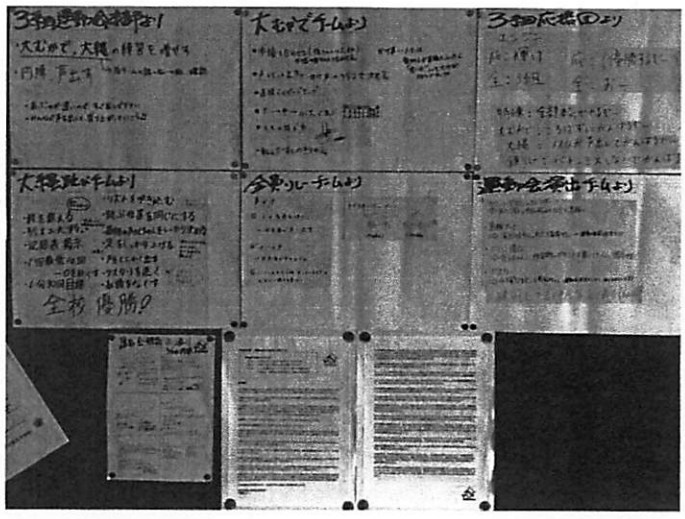
〔効　果〕テーマ班の生徒は他のテーマの内容を知らないことから、混合班にて互いに教え合う状況が設定されるため、情報交換の必然性が生まれる。学習者間の経験のやり取りが活発に行われ、生徒相互の関わりは深くなる。

〔留意点〕自分が担当したテーマを中心とした意見交換や調査になるという問題があるため、各混合班での意見や質問と共に、それらを踏まえた全体での内容の共有化を図ることが大切である。状況によっては、補充的な学習として他のグループのテ

ーマも調べることを行わせたりする等、生徒の実態に応じて工夫・改善していくことが重要である。

本実践では、大リーダーとなる実行委員を話合い活動の班には固定させずに、フリーの立場で全体に助言する役割を与えた。そうすることで、リーダー自身が全体を見渡し、全体をまとめる力を伸ばすことができた。

【実践を通して】



ジグソー法による話合い活動を通して、一人一人が役割と責任を自覚して取り組む姿勢が高まり、班での話合い活動が互いの考えを理解するのに効果的であった。決定内容はテーマごとに教室掲示し、各リーダーが中心になって実践の確認を含めた振り返り活動を行うことで、学級集団のさらなる連帯感や結束力を深める機会となった。

評価資料の活用については、学級活動カードの自己評価や相互評価の内容について、教師から言葉による伝達や学級通信への掲載を行うことで、中心的存在の生徒だけでなく、フォロワーとして活躍している生徒たち一人一人がどのように感じ、考えているのかを共有し、自己理解や相互理解を深めるための支援を行った。その結果、よりよい人間関係を築くための自主的・実践的な態度を育むことができた。また、代表生徒が中心となり、自分たちの意思により積極的に活動できるようになってきたことも大きな成果である。自作の通信やプリントを作成し、学級の生徒に配布するなどの意欲的な面が見られるようになったこともあり、生徒同士による、よりよい集団活動が実践された。

ジグソー法による学級活動の展開は、これまでに移動教室・運動会・音楽祭・卒業の場面を中心として、教育研究員時より現在まで、中学校１年生～３年生まで、約５年間に渡り検証を行ってきた。担任と副担任のどちらの立場からも学級活動に関わったが、どの取組でも生徒一人一人が役割と責任をもって自主的・実践的に活動できる場面をつくることができたことが大きな成果であった。また、近隣校での校内研究でもジグソー法を取り入れた教育実践を学年単位で取り組んでもらうことができ、生徒の自主的・実践的な活動に大きな後押しとなったと評価をいただいた。今後も学級活動のさらなる場面で検証を続けていきたい。